

「愛しなさい」

ルカの福音書 6:27~38

はじめに

今日の箇所はイエシュアからの、すなわち神である主からの「~しなさい、~してはいけません」という戒め「命令」が多く記された箇所です。万物を創造された神であられる主の権威は絶対であり、その「命令」もまた然りです。本来は意思を持たぬはずの風や海、すべての病をイエシュアは叱りつけ、これらを黙らせました。また霊的な存在である天の御使いはもちろんのこと、敵である悪魔、悪霊どもでさえもこれに従っています。では私たち人間はどうでしょうか。ひょっとすると皆さんはこのような誤解をしてはいないでしょうか。自分は神に従っていない、いつも逆らって生きていると。しかし悪魔さえも従わせる神の権威、その命令に逆らうことなど誰もできません。以下の箇所を見てください。

創世記【新改訳 2017】

2:15 神である【主】は人を連れて来て、エデンの園に置き、そこを耕させ、また守らせた。

2:16 神である【主】は人に命じられた。「あなたは園のどの木からでも思いのまま食べてよい。

2:17 しかし、善悪の知識の木からは、食べてはならない。その木から食べる時、あなたは**必ず死ぬ。**」

これは主が最初の人アダムに命じられたものですが、彼はこれに逆らうことができたでしょうか？答えは「いいえ」です。もしアダムがこの主の権威に逆らうことができたのなら、アダムは今もこの地上に生きているはずです。よく読んでください。主は「善悪の知識の木からは、食べてはならない」と命じられたのではありません。「**善悪の知識の木からは、食べてはならない。その木から食べる時、あなたは必ず死ぬ。**」と命じられたのです。そして確かに「アダムは…死んだ（創世記 5:5）」と聖書にあります。主がお定めになったこの事実逆らって、死ぬことなく生き続けられる人は誰もいません。このように、神である主の、イエシュアの権威、その命令は絶対なのです。まずこの真理を理解していなければ、今日の箇所は絶対に読み解けません。読み解けないどころか、人の側の意思や選択で主の御心を変えることができるというような、神のご計画を無視した、誤った解釈へと陥ってしまいます。神は人に自由意志を与えられたと説く人もいますが、聖書のどこにそのような記述があるのでしょうか。もし人に神のご命令をも退けるほどの強大な自由意志があるとしたらその人はもはや人ではなく、神と同等かそれ以上の存在です。神である主は唯一です。他に神はいません。これに並ぶ者もいません。ゆえにその権威、命令は唯一絶対なのです。この真理を今ぜひとも覚えましょう。

しかし驚くべきことに、そのような神、主であっても決して逆らうことができない存在があります。それは今私たちが手にしている聖書です。聖書は唯一絶対の神の権威によって書かれたものであるため、一切の変更、削除、追加を受け付けません。それがたとえ神ご自身であっても手を加えることができません。主はこれまで、そしてこれからも全くこの聖書に記されたとおりに従って事を進めて行かれます。ゆえに聖書は、神をも従わせる天地宇宙最強の存在なのです。そのような存在を、私たちは手にし、今日もこ

れを学ぶことができるとは、なんとという特権、なんとという選びでしょうか。どうぞこの事実を重く受け止め、恐れつつ、へりくだった思いで学んでまいりましょう。聖霊の助けがありますように。

1. 愛する

ルカの福音書【新改訳 2017】

6:27 しかし、これを聞いているあなたがたに、わたしは言います。あなたがたの敵を愛しなさい。あなたがたを憎む者たちに善を行いなさい。

「愛しなさい」、聖書を、神を理解する上でこの「愛」について学ぶことは非常に重要です。

I ヨハネの手紙【新改訳 2017】

4:8 愛のない者は神を知りません。神は愛だからです。

4:16 私たちは自分たちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛のうちにとどまる人は神のうちにとどまり、神もその人のうちにとどまっておられます。

と言われるほどに、愛すること、愛は神の全存在を象徴する言葉、行為です。イエシュアはこれを最も重要な戒め、命令として以下の箇所さらに詳しく説いておられます。

マルコの福音書【新改訳 2017】

12:29 イエスは答えられた。「第一の戒めはこれです。『聞け、イスラエルよ。主は私たちの神。主は唯一である。

12:30 あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』

12:31 第二の戒めはこれです。『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。』これらよりも重要な命令は、ほかにありません。」

よく注意して読んでいただきたいことは、この戒めは申命記 6:4 からの律法を引用し、解き明かされたもので、本来は「聞け、イスラエルよ」とあるように、イスラエルの子孫、ユダヤ人に対して語られたものです。主を愛し、そして「あなたの隣人」を愛するようと命じています。これは彼らの同胞、同じイスラエルの民を指すものだけではなく、彼らと同じイスラエルの神、主を自分の神とするすべての異邦人も指すものです。先ほどの「愛のうちにとどまる人は神のうちにとどまり、神もその人のうちにとどまっておられます」という御言葉にあるとおり、愛はイスラエルと異邦人を同じ神の民として一つにするという働きを、そのような神のご計画を指すものなのです。まさにこう記されているとおりです。

コロサイ人への手紙【新改訳 2017】

3:14 そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全です。

このように、愛、愛するとは神である主とイスラエルの民を、そして私たち異邦人を一つに結ぶもの、そのような事実を指すのです。パウロはこの隣人愛の価値、重要性をこのように説いています。

ローマ人への手紙【新改訳 2017】

13:9 「姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。隣人のものを欲してはならない」という戒め、またほかのどんな戒めであっても、それらは、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」ということばに要約されるからです。

今日の箇所にも多くの戒めが記されていますが、それらもすべてこの「敵を愛しなさい」という戒めに要約、集約されるということです。ですから今日は「愛」についてしっかりと学びましょう。

冒頭で述べたように、主の戒め、命令としてのイエシュアの御言葉は絶対です。私たちの側で好き勝手にしたりしなかつたりできるものではありません。つまりここでイエシュアが述べておられることは、一つも違わず必ず成就する神のご計画を指して言うておられるのです。どうか神の語っておられる「愛」を皆さんの感覚で理解しているような、ドラマや小説にあるようなそれと混同しないようにしてください。その混同を避けるためには、聖書で最初に「愛する」という言葉が用いられた箇所を見る必要があります。そこに神が提示しておられる「愛」の原点、本来の意味があるからです。この「愛する」ことを聖書の原語、ヘブル語でアーハヴ(אהב)といいますが、この言葉の最初の言及、アーハヴという言葉が聖書に最初に使われた箇所は以下のものです。

創世記【新改訳 2017】

22:2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたが愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そして、わたしがあなたに告げる一つの山の上で、彼を全焼のささげ物として献げなさい。」

これは神がアブラハムに語られたものです。この御言葉から「愛する」とは本来、主に献げるため、礼拝するために「モリヤの地」に連れて行く、ともに行くことを指しているのです。この時点ですでに私たちが抱いている愛の概念と本来のそれが大きく違っていることがわかりますね。ではこの「モリヤの地…一つの山」とはどこでしょう。聖書にこの地名はここと後もう一箇所にはありません。それが以下のものです。

Ⅱ 歴代誌【新改訳 2017】

3:1 ソロモンは、エルサレムのモリヤの山で【主】の宮の建築を始めた。そこは、主が父ダビデにご自分を現され、ダビデが準備していた場所で、エブス人オルナンの打ち場があったところである。

このようにモリヤとは「エルサレムの…【主】の宮」、エルサレムの神殿を指しており、つまり「愛する」アーハヴとは本来、ここに人を、礼拝者を連れて行く、ともに行くことを意味する言葉なのです。一般的な愛の概念は時代や文化、人の価値観によって異なり、常に曖昧なものです。しかし神の提示しておられ

る「愛する」アーハヴはイスラエルの神、主のみもとにイスラエルの民を、そして本来は敵であった異邦人の国々の民をともに集めることを指す言葉なのです。

またアーハヴとは、牛の頭を象り「神の権威」を表すアーレフ(א)、窓（換気口）を象った「見る、息をする、生きる」ことを意味するヘー(ה)、そして家、国を意味するベート(ב)の三つが組み合わさった言葉であり、これらの意味を組み合わせると「**神がその権威によって目をとめた人を生かされる家**」という意味が、またはそこに「**力ある神を見る家**」すなわち神が見える形となられて、人となられて住まわれる家、宮、という意味がアーハヴには秘められているのです。この神が永遠の昔からご自身の権威による選びによって目を留めておられる家とはすなわちモリヤの山、エルサレムの主の宮、神殿であり、そこに住まわれる王の王、主の主イエシュアの治める御国、「神の国」メシア王国、千年王国とも呼ばれるその完成が、神のご計画が「愛する」アーハヴという言葉には秘められているのです。これがイエシュアが語っておられる「愛」という言葉であることをぜひ覚えてください。翻訳された言葉では決して知る事のできない、ヘブル語でしか、イスラエルの民の言葉でしか理解することのできない神の事実、イスラエルによって神の恵みに与るといふ真理がここにあるのです。

このような意味をもってイエシュアは「**愛しなさい**」と命じられたのです。何度も言いますが神の命令は絶対です。つまり「神の国」は必ずこの地上に、イスラエルの上に、私たち異邦人の上に、御子イエシュアによって成就します。私たちは普通「～しなさい」と命令されることに少なからず苦痛や不快感を持ちます。聖書は、神の御言葉は私たちを苦しめるためのものではなく、希望を与える良い知らせ「福音」です。どうか聖書を命令書としてではなく「福音」、神の国の「福音」として受け取ってください。

2. 神の国は…

「神の国はこのようなものです…」と、福音書の中でイエシュアは再三にわたりたとえを用いて「神の国」について説かれました。しかし次の箇所にはそのフレーズが使われていません。ということは、これはたとえではなく「神の国」がどのようなものかを字義通りに表したものと解釈すべき箇所です。これをつい私たちは自分の今の生活に、人間関係の中に当てはめようとします。そして必死に自分を神に従わせようとします。そしてそれができたと思うと感謝と言いつつ満足感と優越感に浸り、できなければ謙遜という名の劣等感と罪責感に苛まれます。しかし今全力でそのイメージを打ち消して、イエシュアが地上再臨され、「神の国」を建てられた状況を思い浮かべながら、イエシュアとともに暮らす御国の民の姿を思い描きながら次の箇所を読んでみてください。

その前に少し補足説明をしておきます。やがてこの地上に建てられる「神の国」は、イエシュアの地上再臨によって始まります。その時地上には悪の限りを尽くしたサタンと獣と呼ばれる反キリスト、偽預言者たちおよびそれに従う国々の民がいます。彼らはイスラエルの民とそれにつながる異邦人たちを根絶やしにしようとしませんが、イエシュアがこれを阻止、彼らを打ち滅ぼし、イスラエルを救い出されるために天の軍勢すなわち御使いたち、および先にイエシュアの空中再臨によって携挙された聖徒たち（私たち）を率いて地上再臨されます。天の軍勢となった聖徒たちにはすでに朽ちることのない、罪の性質を持たない永遠のいのちの身体が与えられていますが、地上でイエシュアを迎える人々にあってはそれがまだのため、彼らは今の私たちと同じ状態、同じ肉体のまま「神の国」に入ることになります。つまり「神の国」、

千年王国、メシア王国にも少なからず罪人がいるということです。しかし偽りの父サタン、悪霊どもはみな捕えられ、獣とその国々も完全に滅ぼされるため、神に敵対するものはいなくなります。何よりイエシュアが王の王、主の主として人とともにおられるのです。善と悪、義と罪のパワーバランスは今の時代のそれと完全に逆転します。神の祝福が人の罪を完全に凌駕するという状況になります。そのような事実を踏まえて次の箇所を読んでみてください。

ルカの福音書【新改訳 2017】

6:28 あなたがたを呪う者たちを祝福しなさい。あなたがたを侮辱する者たちのために祈りなさい。

6:29 あなたの頬を打つ者には、もう一方の頬も向けなさい。あなたの上着を奪い取る者には、下着も拒んではいけません。

6:30 求める者には、だれにでも与えなさい。あなたのを奪い取る者から、取り戻してはいけません。

6:31 人からしてもらいたいと望むとおりに、人にしなさい。

6:32 自分を愛してくれる者たちを愛したとしても、あなたがたにどんな恵みがあるでしょうか。罪人たちでも、自分を愛してくれる者たちを愛しています。

6:33 自分に良いことをしてくれる者たちに良いことをしたとしても、あなたがたにどんな恵みがあるでしょうか。罪人たちでも同じことをしています。

6:34 返してもらうつもりで人に貸したとしても、あなたがたにどんな恵みがあるでしょうか。罪人たちでも、同じだけ返してもらうつもりで、罪人たちに貸しています。

6:35 しかし、あなたがたは自分の敵を愛しなさい。彼らに良くしてやり、返してもらうことを考えずに貸しなさい。そうすれば、あなたがたの受ける報いは多く、あなたがたは、いと高き方の子どもになります。いと高き方は、恩知らずな者にも悪人にもあわれみ深いからです。

6:36 あなたがたの父があわれみ深いように、あなたがたも、あわれみ深くなりなさい。

6:37 さばいてはいけません。そうすれば、あなたがたもさばかれません。人を不義に定めてはいけません。そうすれば、あなたがたも不義に定められません。赦しなさい。そうすれば、あなたがたも赦されます。

6:38 与えなさい。そうすれば、あなたがたも与えられます。詰め込んだり、揺すって入れたり、盛り上げたりして、気前良く量って懐に入れてもらえます。あなたがたが量るその秤で、あなたがたも量り返してもらえますからです。」

どうでしょうか。「神の国とはこのようなものです」。このような人々、出来事に満ちた世界、それがイエシュアがその絶対の権威によって命じられ、イエシュアご自身によって必ず成就される「神の国」に見られる風景、人間模様です。今の時代には、めったにお目にかかれないこのような状況ばかりがあふれる世界を、パラダイムシフト、価値観が逆転する現実をやがて私たちは体験し、味わい、「ああ、まさにこの御言葉のとおりだ！」と言う日が来るのです。これはその良い知らせ、「福音」です。決してあなたが部分的に自身を矯正して為せるわざではありません。これは神の御業、神のご計画なのです。

3. 罪

今日の箇所がすべて「神の国」についてのものだとして聞いて、どう思われましたか？では今は何をしても良いのか、今はどうしたら良いのか？ときっとあなたは思うでしょう。それです。それが問題なのです。その的外れな視点こそが間違いのもとであり、それを「罪」と言うのです。なぜ神が将来の、完成の話をしておられるのに、それに目をとめようとしないで「今」ばかりに目を向けるのですか。なぜ神のご計画の、その完成の御言葉に耳を傾けようとしないで人間の言葉、人の声ばかりを聞くのですか。なぜ目を逸らすのですか？なぜ的を外すのですか？あなたがあなたの「今」あるいは過去に目を向ける時、そこに神のご計画の、その完成はありますか？あるいはそれと同じ価値のある希望はそこにありますか？絶対にありませんよ。私たちの主イエシュアは初めから徹頭徹尾この「神の国」の完成を見る視点に拘り、一瞬たりともそこから目を離さずにとどまり続けておられ、今も全くそうなのです。それなのにどうして「今」の話を、今の自分の話をするのですか？

「神の国」に目をとめ、その御国の福音に耳を傾けるとは、神の御声を聞くとは、それ以外の声、言葉に耳を貸さないということです。「神の国」の完成、これを唯一の希望とし、これ以外のものに心を、目を奪われないということです。それが、それこそがあえて言うところの「今」私たちがしなければならないこと、なのです。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

3:11 わたしはすぐに来る。あなたは、自分の冠をだれにも奪われないように、持っているものをしっかりと保ちなさい。

しかし、かく言う私も、皆さんと全く同じで、日常の雑事の中に埋没し、人間的な狭い視野でしか物事を捉えられない者の一人です。ですからこうして教会に集まり、御言葉を語りつつ耳を傾け、日常的にズレてしまうこの視点を「神の国」の方に修正していただいています。そして今の問題を助けてください、という祈りから、「御国が来ますように、主イエシュアよ、来てください。」という祈りに修正していただいています。この教会、この礼拝はそのための場であり、そのための時間です。また来週もぜひ集まってください。そしてまたともに「神の国」を求めて祈りましょう。「御国が来ますように。主イエシュアよ、来てください」と祈りましょう。聖霊の助けがありますように。